

Title	西[遊]夢録(十八)
Author(s)	瀧川, 規一
Citation	地球 (1929), 11(3): 224-229
Issue Date	1929-03-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/183569
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

granosa 及び *Ostrea palmipes* が存在する。中部層の *Turritella* cf. *multilirata* を特有とする。中村黒田兩先生が擧げられた貝の中

1. *Arca granosa* L.
 2. *Ostrea palmipes* Sow.
 11. *Potamides cingulatus* Gmel.
 13. *Natica* sp.
- は下部層から

8. *Umbonium costatum* (Val.) Kiener.
9. *Stomatella lyrata* (A.Ad.) Pils.
12. *Turritella* cf. *multilirata* Ad. et Rye.

西遊夢錄

(十八)

瀧川規一

蘇國の部

(XIX) エデンバラ市及其附近

國立畫像展覽場(2) チャールス一世(Charles I.)の時代は實に物騒な世の中である。國王をはじめ王黨の歴々として額縁内に嚴然と威儀を正してゐる人々は何れもその末路が悲慘で

14. *Ringicula arcata* Gld.
は中部層から出たもので残りはどちらからか判らない。以上の外中部層には

Nassarius japonicus (A.Ad.)
N. liosence (Phil.)

Arca Yokoyamai n.n.

Cardita cunningiana Brug.

等がある。堺の中部層の貝類の殆んど全部は安久川のもので共通である。之から考へて安久川の含化石砂層は堺の含化石層の上部及び中部層に對比するものと謂ふべきである。

ある。ヨーク太公は鑛面で而も面鏡である。太公はこの姿のまゝで刑の審問を受けた。こゝに並んでゐるハントレイ侯爵(Margus of Huntley)とハミルトン大公(Duke of Hamilton)もまたモンテローズ侯爵(Montrose)も皆斷頭臺上に首を刎られたのである。アーガイル侯(Margus of Argyll)に至つてはチャールス二世の頭に王冠を冠らせた人であるが自ら

の首を失つた人である。

王黨に敵對した反對黨の面々もずらりと並んで居る。そのうちにも傑出してその名天下に隠れなきオリヴァ・クロムウェル(Oliver Cromwell)が意志の強さうな顔をして中央に控えて居る。これに反し王政復古の主動力となつたモンク將軍(General Monk)も控えて居る。この室こそ文字通りに異越同世である。

王政復古の時代に於ける多くの人物中殊に吾々の興味を惹く人物は書籍蒐集の道樂をもつて居り蘇國の國立圖書館を建設したマッケンジー(Mackenzie)と皇妹ヘンリアタ(Henrietta)とである。皇妹は佛蘭西の文豪モリエール(Molière)のネーネ(Cornelle)及びラシーン(Racine)の保護者となつた點で知られて居る人である。オーレンヂ侯ウィリアム(William Prince of Orange)が蘇國系の皇后メリと共に一六八八年に迎へられて蘇國に君臨するやジャコビン黨の謀叛があつた。従つて謀叛の首謀者等が顔を列れて居る。

陳列館の最上階に登ると時代は十八世紀になり畫像は女皇アン(Queen Anne)を以て始まる。十八世紀の蘇國の最大事件は一七〇七年の英蘇兩國會の合同(Union of the Parliaments)である。この合同によつて兩國に絶え間く起つた紛争の聲が終息するであらうと思つた宰相シーフイルド伯(Baron of Seafield)が「昔の歌聲の終焉が來た」(There's the end of an auld song)と云ふ名言を吐いた。伯は中々の美男となつて額縁の内に納つてゐる。詩人ポーブ(Pope)が「彼の爲め

に元老院も戰場も共に震駭する」とてその威武を稱揚したのであるが蘇人の間には本名よりも妻君の名によつて知られてゐるアーガイル太公も居る。また漂流小説のロビンソン・クルソーの著者デフォ(Deloe)によつて「王國中最大の助言者である」とて讃辭の極を盡されて居るステア伯(Baron of Stear)も居る。以上は何れも議會合同に功勞のあつた人々である。その合同運動の反對者として一廉の働をなした男も居れば、従つて蘇國に對しては愛國者として名を賣つて居る人も居る。また合同運動に反對の演述をなしそれが名演述であつたが爲めに演述だけで有名になつてゐる男も居れば、十九世紀の小説家サツカリー(Thackeray)の有名な歴史小説エズモンド(Esmund)中に俠氣盛態をもつて際立つて男振りをを見せてゐる第四世のハミルトン太公も居る。

十八世紀に入つて蘇國の歴史として忘る可からざるものは二回の暴動事件である。一は單に「五十年の暴動」として知らるゝものであり他は、五十年の隆起として稱へらるゝ暴動である。一五年の暴動は議會合同運動に反對して蜂起したのであるが失敗に終つて參加した諸侯は夫々亡命を餘儀なくされた。亡命者のうちには他國に於て偉名を擧げたものが無いではなかつた。プリシヤル伯(Baron Marischal)はフレデリック大帝(Fredrick the Great)に仕へて佛蘭西、西班牙に大使として派遣されその兄弟のセイムス・ケイス元帥(Marshal James Keith)にフレデリック大王(Fredrick the Great)下の名將の一人として名を擧げたが、同じく亡命者の一人でありながらマリア・テ

ンサ(Maria Theresa)の下に軍隊の將としてフレデリック大王に抗戦した者も居る。また同じく叛軍の將であつて暴動後蘇國の高地に道路を建設したが爲めに地方民の崇敬の的になつて居る人物も居る。その他大小の人物の行末や末路を考へる時異國のこととも思へぬ程に暗示を得ることが多大である。四五年の事件の中心人物はセームス八世(James VIII)である。彼の小供時代の肖像があり露西亞の王妃と結婚せんとする頃の若々しい肖像もある。その傍には王妃の像もある。更に勳像の上で美少年としてひき立つて見えるプリンス・チャールズ(Prince Charles)の年少の姿がある。その他四五年の事件に干與した人々のうちでも暴動を出来る限り限定せんとつとめそれが爲めに性來殺伐なるカンバランド太公(Duke of Cumberland)から「人道を喋々する老婦人」と罵られたフォープス(Förbes)卿も居る。

十八世紀は以上の暴動事件以外に知識界に於て蘇國も亦進歩した時代であつた。従つて蘇國の詩人學者として名をなしたものが輩出した。これ等の人々は文學研究の徒輩にとつて最も重要な人物である。第一に詩「四季」(The Seasons)の作家として有名なセームス・トムソン(James Thomson)が居る。次に詩人のアラン・ラムジー(Allan Ramsay)が居る。從來蘇國に於ては道德上宗教上餘りに嚴格に過ぎた結果蘇國人の生活をして偏狭に傾かしめ學問藝術をして充分に發達せしめなかつた。然るに十八世紀の後半に至つてその反動として比較的穩健にして自由なる精神が勃興した。教會に於ても中

庸主義が優勢となり蘇國の知的生活に於て異常の發達を遂げたのである。斯る精神的氣運の所産として輩出せる人物中顯著なる人物の一人として怪疑者の哲學者史家であるデヴィッド・フュー(David Hume)が居る。また史家中中庸主義の首唱者であるロバートソン(William Robertson)が居る。富國論の著者アダム・スミス(Adam Smith)も居る。その他天文學者のフアガソン(Ferguson)も居れば地質學者のハットン(Hutton)化學者のブラック(Black)も居る。當時の名醫として喧傳された人々をばじめその他多くの謔々たる人物が居る。ジョンソン博士の傳記記者として不朽の名を垂れて居るボズウェル(Boswell)も居る。建築家も居れば肖像畫家も居り彫塑家も居る。行政家も居れば陸海軍の名將も居り探險家も居る。擧げ來たれば際限なき程に濟々たる多士が顔を揃えて額縁内の主人となつてゐる。

メリ女皇及びジョン・ノックスが前の世紀の大立物とすればそれに優るとも劣らぬ程度に或は肖像に或は胸像にまた或は小照に或は版畫に或は筆蹟に凡ゆる方面に亘つて材料を蒐集されて居る。詩人バーンズが居る。詩人バーンズは家豊かなる家庭に人となり農事にいそしんで失敗を重ねた詩人であつて都會人から見れば誠に田舎漢である。スコットが云つて居るバーンズの人物評が或は好適の評言であるかも知れない。スコットの言を借りて云ふならば「バーンズの體格は農夫らしく頑丈である。その態度は成程田舎^{ヒナ}びであるが然し田舎の愚漢として特徴づけられる程の馬鹿者ではない。單純質

素ではあるが威厳がどこやらに備つて居る。斯る評言は或は詩人的材能の凡非なることを豫め知つて居るからさう思へたかも知れないがその容貌には富んだる常識と慧敏さとが顯はれ殊に眼には詩人らしい性格と氣質とが窺はれる。こんな眼眸を他人の頭に見たことがない」と云ふこの部屋には詩人に直接間接に關係のあつた人々の肖像が共に陳列されて居る。例へば美しいジャン(Bonnie Jean)と詩人に云はれた女性、詩人の作詩の爲めに樂譜を作つた作曲家のトムソン(Thomson)詩人の書簡中に述べられたクラリнда(Charinda)と云ふ異性、バーンズの先驅者たる詩人フアガソンまでが顔を見せてゐる。實にバーンズに關する研究には至れり盡せりである。

十九世紀に入ると蘇國に於ても再び世狀一變し或は機械或は造船また或は諸種の製造業或は通商貿易の方面に於て夫々の天才を輩出し文學に於てはロマンチックな氣分が旺盛し繪畫に於ては從來局限されてゐた肖像畫の範圍を脱して或は風景畫を試み風俗畫に筆を染めた者があるやうになつた。宗教政治に於ては益自由な空氣が溢り社會的生活に於ては人間生活の溫き親しみを覺えるに至つた。同時に古より風俗習慣や傳統的偏見が漸次消滅せんとしてあるが人種的尊重心と特徴は猶も存続してゐた。この十九世紀に入つて最初に擧ぐ可き蘇人には邦人の兒童まで鐵瓶の蒸氣の逸話によつて其名を知つてゐるワット(Watt)が居る。また最初の蒸氣船を航行せしめたベル(Bell)もワットのお相手に顔を列ね、瓦斯燈を案出したマードック(Murdoch)も居れば、倫敦に舟行するもの

が誰しも御厄介になる倫敦ドックの設計者であるレニー(Rennie)も居り、燈臺の建設者のスチヴンソン(Robert Stevenson)も居る。

十九世紀は三十二年まで進むと文豪のスコット(Sir Walter Scott)が居る。これまたバーンズと等しく數多き種々の肖像によつて生前如何なる人物であつたかを彷彿たらしめて居る。梅檀は双葉より香しの譬に洩れず陳列の小照には五歳にして既に特徴のある頭を歴然とあらはして居る。また最後の歌唱者の歌(The Lay of Last Minstrel)を作りアッシュチール(Ashieil)に居住して居つた時代の畫像もある。屢言及されたザ・ハート・オブ・ミッド・ロシアン(The Heart of Mid Lothian)に筆を執つて居つた頃の像もある。大理石の胸像はスコットの傳記の作家として後昆に名を垂れて居るロックハート(Lockhart)が文豪の特徴を最良くあらはすものであると云つたものである。その他半身の坐像もあれば頭部丈の習作もある。アボッツフォード(Abbotsford)の書齋に坐して筆を手にして居る。小形の全身像もある。文豪が書いて居るものは恐らく彼の最後の小説であらうと思はれる。更にデスマスク(Death Mask)があり轉々居を變へて居たエデンバラ市時代に出來たスケッチや版畫がいくつもある。就中面白きはスコットとその詞友等がスコットの邸宅アボッツフォードに相會して居る繪である。當時の文豪の豪華な生活と共にこれ等の詞友の往復が如何に頻繁であつたかを想像せしめるに充分である。

スコットを中心とし十九世紀の前半に於ける蘇國の文士及

が多少とも蘇國に關係を有する英蘭の文士等の肖像も共に陳列されて居る。エザンバラ市で發行されてゐた有名な雜誌ブラックウッド誌(Blackwood's Magazine)上に於てクリストファ・ノース(Christopher North)の文名をもつて知られて居たジョン・ウィルソン(John Wilson)教授の顔が此處に見えて居る。セルカークシヤ(Selkirkshire)のヘッツリツク(Ettrick)村の羊飼で一朝先聖の詩人ラムシーの詩を讀んで靈感を得て以來幾多の叙情詩を作つたホッグ(James Hogg)が居る。歌謡の作家としてまた美貌と魅力とを以てストラスマーンの花(The Flower of Strathearn)と渾名されてゐる佳人のネーナン(Baroness Naine)も居る。繪入倫敦新聞(Illustrated London News)の主筆であつた「Cheer Boys, Cheer」の歌を作つて生前に四十萬冊を賣つたと云はるマッキンキー(Charles Mackay)も居る。畫家としてウィルキ(Wilkie)ハーバーン(Raeburn)その他が居り。エザンバラ・マンネ(The Edinburgh Review)誌上に靈筆を奮つた人々も居る。詩人バイロン(Byron)キヤムベル(Campbell)及び「亞片飲む男の告白」(The Confessions of an English Opium Eater)の著者デ・クインシー(De Quincey)の三人が居るがこれ等の人物は多少蘇國に關係があつたと云ふ點で顔を列れて居るのであらう。

十九世紀の後半に入るに先立ちてトーマス・カーライル(Charley)が居る。これまた中心勢力を占める代表的人物である。従つて種々の畫像が陳列されて居る。若々しく愉快であ

な顔をして鬚を綺麗に剃つた彼の肖像があり、頑健な低地蘇人そのまゝを表したメダルの肖像があるかと思へば、既に倫敦に於て名を成し「チヘルシの聖人」(The Sage of Chelsea)として喧傳された當時の畫像がある。この頃のカーライルの様子は頭髮梳らず鬚を剃らず灰色のドレンシンゲ・ガウンを纏うてゐる。胸像水彩畫の肖像、メダルにした肖像、版畫の肖像及スケッチなどがあつて出来る限りの材料を集めて居る。うちにも畫家レグロス(Legros)がカーライルに私淑し常に附纏うてゐたが遂に描くことを許されたと云ふ曰く附きの像がある。序に若き頃の友人のアーヴィング(Edward Irving)の姿も見えてゐる。

十九世紀の中頃には蘇國の教會が英蘭の教會から分離して獨立な所謂蘇國の自由教會(Free Church of Scotland)が確立された。史上では一八四三年の分裂(Division of 1843)と稱してゐるのであるがこの運動に干與した人々の畫像が一團をなしてゐる。

十九世紀の後半に至つては諸方面の知名の士が雜然と集つてゐる。軍人あり探檢家あり政治家あり藝術家あり史家がある。吾々の普通知つてゐる人々をそのうちから摘出するならば英語の教科書にてお馴染のマコーリ卿(Lord Macaulay)が居る。其父が蘇國のプレスビテリア派の牧師であつたから此處に加へられて居る。

文學通のバックスマン(Sir William Stirling Max Well)が居り「米國共和國」(The American Common-Wealth)の

著者として日本の讀書界にも知られて居るアライズ卿(Lord Bryce)も居る。この人は蘇國との關係としては只アバザーンを選舉區として議會に席を占めたから此處に加へられたのであらう。更に誰も知らぬ者なき程に極東にも知られて居るグラドストン(W. E. Gladstone)が居る。グラドストンは生前常に彼の血液の一滴たりとも蘇國の血ならぬはなしと云つて居た。詩人のイーターン(W. E. Aytoun)論說作家のスミス(Alexander Smith)大に關する單篇物「ラブとその友」(Rab and His Friends)にて屢學校などにて讀まる「ジョン・ブラウン(Dr. John Brown)詩人小説家である「スコッドナルド(Dr. George Macdonald)蘇國西高地を背景にしたロマンスの作家「ブラック(William Black)ポルト氣分を高調して文名「フィオナ・マクレーオド(Fiona McLeod)によつて知られてゐる「シャープ(William Sharp)最後に「スチヴンソン(Rodert Louis Stevenson)が居る。以上は多少共に文學に關係した人々ばかりであるがその他に醫者として有名な人々、植物學者の「ブラウン(Brown)電氣學の大家「ケルヴィン卿(Lord Kelvin)地質學者の「ライエル(Sir Charles Lyell)靴直しをなしてゐたが自然科學者として名を成した「エドワード(Thomas Edward)造船學の大家「ネーピア(David Napier)「フォルスの鐵橋の設計者「アロル(Sir William Arrol)最後に「腫瘍藥「クロロフォームを發見して幾多の外科手術を受ける人々の苦痛を軽減して居る「シンプソン(Sir J. Y. Simpson)等數へ來れば應接に遑がない

新著紹介

い程名士が觀覽者を額縁の内から脱みつけてゐる。日も疲れ脚も疲れ果て、旅宿に歸れば多くの偉人に感服されて夢圖かならずである。

新著紹介

○日本地形誌

辻村太郎著 菊版四五五頁 東京古今書

院發行 二月 定價四圓二〇錢

一年餘の間翹望して居た日本地形誌が公にされた。「地形學」が出てからこの數年の間に地形學に關する知識は全日本に亘つて廣められ且つ深められた。而して今や日本の地形を基礎とした新しい地形學を纏めて載きたいといふ希望は「地形學」の著者の肩に誰れもが負はせて居た。我々地學愛好者は日本地形學を手にして巻を未だ開かざる前に先づ大きな感激と期待とに浸らざるを得ない。序から精讀してゆく。著者は地理學の分科中地誌の重大なるを説く、而して地形的地誌の方面に貢獻する爲めに茲に南日本に關する部分を發表されたのである。本書は地形論及地形集の二編から成る。地形論に於ては第一に南日本の地質構造上の諸論を釋いて地形の真相を觀る基礎的知識を供提して居る。第二章に於て南日本の肢節を細論し、以下主要な地形と其の成因を斷層地形、準平原、嶋弧の形成、地震帶及火山帶、地形發達、山形、谷形、海岸形及氷蝕形の題下に説いて居る。地形發達の章の如きは